

町内の観光農園での差別発言

昨年の夏ごろ、県外から来られた方によって町内の観光農園で部落差別発言事件が発生しました。この事件は、社会的に存在する偏見や差別意識が象徴的に現れた事例と思われれます。



町内の事務所、駅や公民館などに配布したステッカー

発生の状況

事業主が、県外の方の不審な行動をとがめたところ、口論となり、県外の方が「新聞社にこのことを投稿するぞ。おまえは、〇〇か」という発言を行ったもの。また、そのときその場に居あわせた町内の人が「なんということを言うだ」と抗議されました。

発言者は同和地区に対してマインスイメージを持っていて、これを自分の優越性に結び付け

たと考えられます。

発言を受けた事業主は、以前に町が配布した差別落書き防止ステッカーを見て、役場へ通報されました。それを受け、差別発言を受けられた事業主の方たちなどへの事実確認を行い、町人権・同和問題差別事象対策会議などを経て、差別発言者の在住行政当局に対して要請文を送付しました。

要請を受けての対応

大山町からの要請を受けて、該当の行政当局では、差別発言をされた本人や家族を交えて数度にわたる研修会が持たれました。

さらに全住民をカバーする人権・同和教育推進協議会の機能強化を図っていくことや公民館活動での人権・同和教育を一層

進めることなど、地域の中での人権・同和問題に対する啓発の機会を持つようになったことなどの報告を得ました。

差別発言と気付かれたキツカケ

差別発言を受けた方たちが、この発言は「差別発言」であると気付かれたきっかけは、平成17年2月28日にJR大山口駅構内トイレで起こった差別落書き事件を受けて、昨春から取り組んだ「広報だいせん」での啓発、さらに差別落書き防止の呼びかけに配布したステッカーを見られてのことのようです。

またその場に居あわせた町民の方が、直ちに差別発言者に対して抗議をなされたことなどは、町民の皆さんの人権意識の高まりを感じることができま

差別発言をなくすために

差別問題や人権問題は理解しようとしなければ、なかなか具体的に見えてこないのではないのでしょうか。知らないで済ませることができない、私たち一人ひとりの問題と言えます。

人権、差別の問題を、私たち自身の問題として考えるために、学校、家庭、職場、地域などで、自分の生き方を見つめなおしてみたいものです。

自分が持つ常識、あるいは世間の常識の中には、時として誤った先入観であったり、偏見であったりする恐れのものも含まれることもあります。

結局、差別意識を解消するのは、ほかでもない自分自身であり決して他人まかせにできないものであることとなります。

人権問題などについて、日ごろから研修・学習の機会を積み重ねて正しい認識を身に付けたいものです。